

## あとがき

本書の中では対立しあうように見える二つの概念の交流として開発経済学を考えてみた。

経済発展という複雑な現象は複眼的な見方を要求している。先進国との格差は開発途上国に不利に働くかもしれないが、開発途上国に対して学習機会と刺激を与えていく。このような二つの側面をとらえるものとして、後発国の理論と従属理論は相互に不可分の関係にある。

対抗している学派が相互に学習していくことも多い。たとえば進化経済学を提案するネルソン、構造主義を提唱するテイラーも、主流であるミクロ経済学、マクロ経済学を吸収して自分の理論を構成している。このようなわけで、開発経済学は多様な学派の競争と協同の中こそ、本当の生きた学問を見つけることができるのだろう。

開発経済学の概念には容易に定義できないものが多い。能力、人間開発、構造や制度といったものがそうである。これらの概念は、開発問題に関わった人に共有されたものであり、シュンペーター（Schumpeter 1954）の言葉では「ビジョン」に該当するようなものである。経済学の分析ツールがビジョンを自己の枠組みに吸収していく過程が学問の発展であるならば、経済分析の枠組みに収まらないような概念に開発研究、地域研究が関心を持つことは望ましいことである。むしろ、個人の内部に、経済学には収まりきれない開発へのビジョンを保ち続けることが重要なのである。経済学をいくら研究していても、その他の分野では専門家は素人に近い。むしろ素人の視点を持ちながら、専門家としての方法を使っていくことが、「自前の概念装置」（内田 [1987, pp.148-51] の言葉）を形成することになるのではないか。それが、これからの開発学、開発経済学のあり方を示唆するものだと思う。

本書は筆者個人の見解に基づくものであり、本書の内容は筆者個人の責任である。まだ誤りが残っていると思われるので、ご指摘下されば幸いである。

本書ができあがるまでには多くの方々のご支援をいただいた。平野克己氏は草稿を精読され、改善のための有益なご助言を惜しむことなく与えて下さった。岡田雅浩氏は本書の編集を担当していただき、本としての完成度を高めるためのご指導をしてくださった。本書の構想は2003年7月30日のアジア経済研究所地域研究部の部内研究会で報告されたが、そこでの参加者から有益なコメントをいただいた。印刷を担当された方々、製本を担当して下さった方々は、本書を美しい書物に仕上げてください。これらの方々のご支援に対して心から御礼申し上げたい。

2004年1月

野上裕生

#### 参考文献

##### 日本語文献

内田義彦．1987．『読書と社会科学』岩波新書 黄版288．

##### 外国語文献

Schumpeter, J. A. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. (東畑清一訳『経済分析の歴史』岩波書店 1955年)